

風来坊 2007 山歩き 2

紀ノ川のランドマーク 紀州富士「龍門山」に磁石石を訪ねて Walk

2007.7.24. by Mutsu Nakanishi



古代大和への入口 紀ノ川 と 紀ノ川のランドマーク 粉河の龍門山 2007. 7. 24.



和泉・金剛山山塊と龍門・九度山・高野山・吉野の山塊の間の谷を東西に流れる紀ノ川 龍門山の山頂より、 2007. 7. 24.

古代日本の中心地となった大和は要害の地

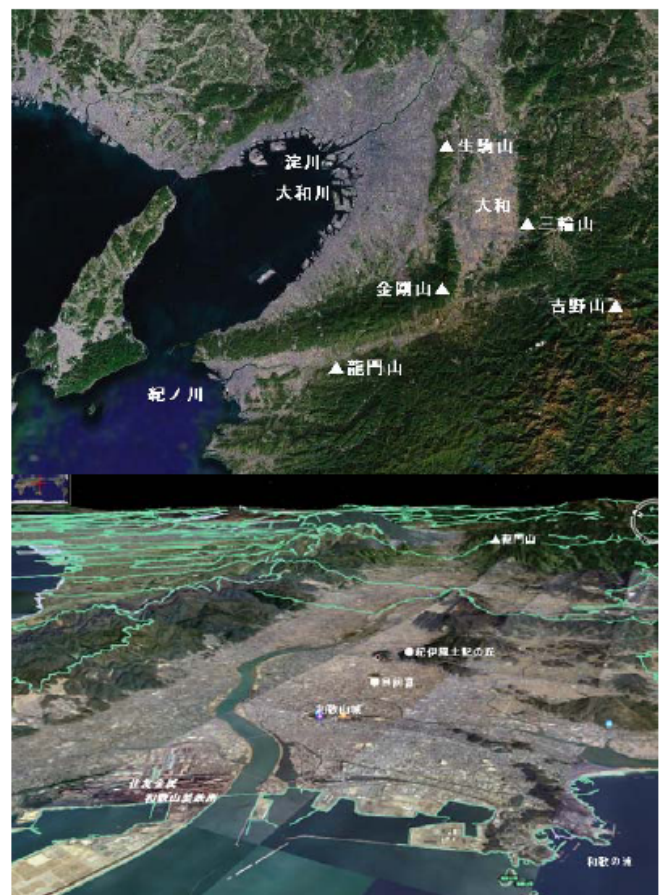
大和へ入るには 北の淀川・木津川を遡るか 東からダイレクトに大和川 そして 南の紀ノ川・吉野川を遡らねばならない。記紀神話では物部氏の祖は「ニヒハヤギ」。天皇家(神武天皇が大和に来る前にすでに天磐船に乗って淀川水系の生駒山山麓 交野・岩磐に舞い降り、生駒山山麓の河内を根拠地として、勢力を伸ばし、遅れて和歌山から熊野・吉野を経て大和にやってきた天皇王家(神武天皇)に大和をゆずり、大和が建国されたという。

また、大和王権に先立つ古墳時代 三輪山の山麓纏向には大形の前方後円墳が築かれ、大和王権の先駆けとなる卑弥呼の邪馬台国があった。

いずれにしろ、この卑弥呼の時代から 初期大和王権が成立する3世紀後半から4・5世紀 日本が統一される過程 その中心は大和であり、その支配力の中心には「朝鮮半島の鉄」があったと呼ばれる。

「鉄」と言うとすぐ武器ということになるが、「鉄」で作られる数々の道具が、国土開発を可能にし、国を富ませる数々の古代開拓の神々の伝承が残っている。

大和が勢力を伸ばしたのも、まだ、日本で製鉄ができず、大陸・朝鮮半島の鉄素材の輸入に頼っていた時代に、北部九州



諸国が握っていた朝鮮半島の鉄の支配力をこれら諸国に取って代わったことによるといわれる。

大和に邪馬台国があったとすれば、卑弥呼はどのルートで朝鮮半島の鉄を運んだのであろうか???

また、三輪山山麓の初期大和王権もどのルートが鉄のメインルートだったのだろうか???

奈良時代の「シルクロード・絹の道」に先立つ3世紀後半から5世紀にかけ、大和と朝鮮半島・大陸を結ぶ「鉄の道」があり、この鉄とともに 数々の渡来人がやって来て、日本統一の道筋が作られていった。

5世紀にならないと馬は日本に居らず、舟に乗って、川筋を遡るルートがメインのルートだったろう。そして、其処には 必ず、「鉄」の痕跡が残っている。

淀川・木津川水系 大和川水系 そして 紀ノ川水系の3ルートの「古代 鉄の痕跡」を求めての walk をはじめた。そして、淀川水系 大和川水系を歩き、残る紀ノ川水系の walk に取り掛かった。

紀ノ川の河口 和歌山製鉄所には随分仕事で通ったのですが、紀ノ川沿いとなるとまったく知らず、その奥は九度山など猿飛佐助・霧隠才三など忍者が活躍する深山の世界と思っていましたが、認識不足。

行って見て 随分違うと思いました。

この古代の和歌山には 古代大和王権と強く結びつき、航海術にたけ、大陸・朝鮮半島との交流・通称に力のあった紀伊氏がいた。また、紀ノ川の奥の大和の入り口 五条・御所の金剛・葛城山の山麓には紀伊氏の同族といわれる葛城がおり、渡来の製鉄・鍛冶集団を数多く抱え、大きな鍛冶工房を持っていた。さらに 日本書紀などによると、ヤタガラスに化身して、神武天皇東征の折、熊野・吉野から大和へ導いたという鴨氏。初期大和葛城王権とのつながりが深い鴨氏の本拠地も金剛山山麓である。

そして、この紀ノ川が東西に流れる広い谷筋は まっすぐに九州・四国を貫き紀伊半島を東西に和歌山から伊勢へと貫く日本の資源地帯 中央構造線であり、この紀ノ川とこれら氏族そして、大和の初期王権のつながりが、日本統一の大きな支えであった。その中心は支配力の源泉となった「朝鮮半島の鉄」であり、その鉄の系譜が鴨氏・紀氏・葛城氏と紀ノ川に繋がっていたのではないかと……

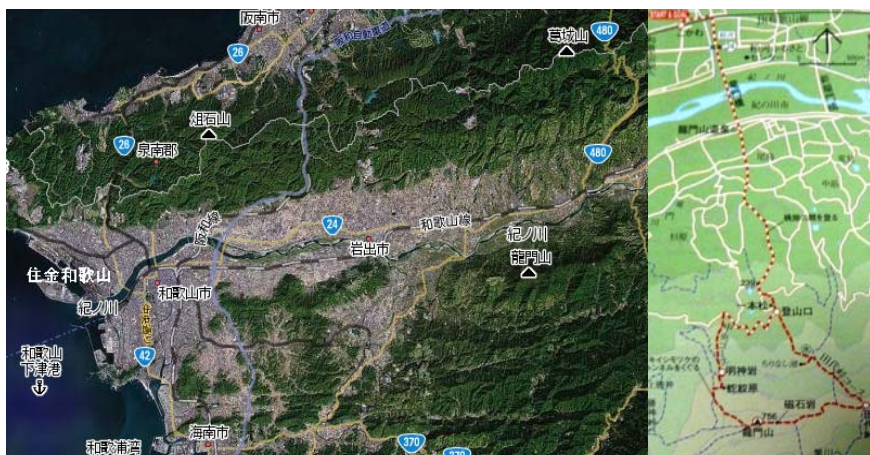
紀ノ川は大和と西日本・朝鮮半島をつなぐ 一番最初の大和の和鉄の道ではないか

阪神間に住む私には 淀川・大和川に比べると本当に遠い存在でしたが、考えて見れば、古代の鉄と深く結びついていた

所に違いない。

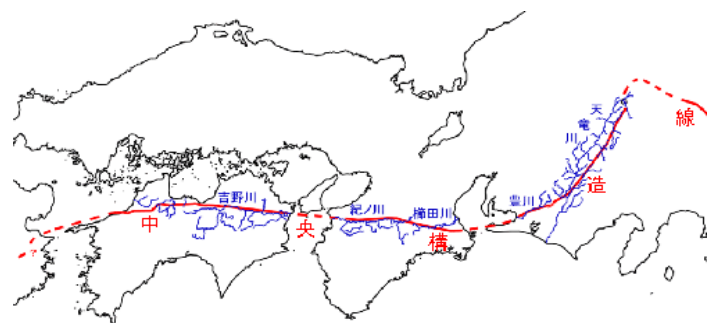
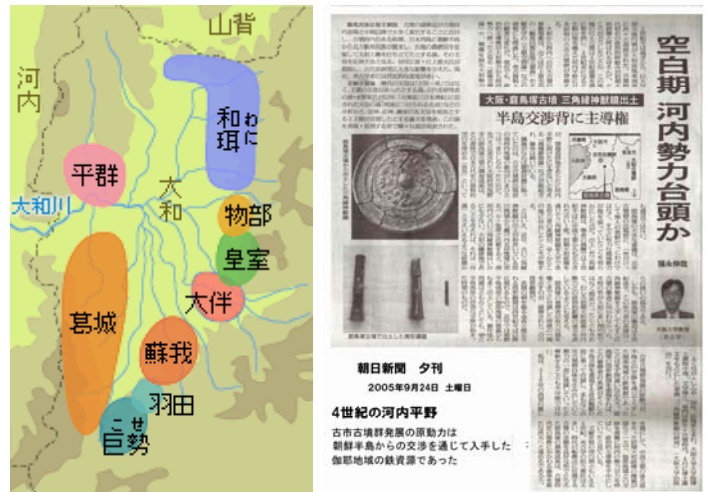
そんな紀ノ川を調べている矢先、「山と溪谷」6月号に紀州富士「龍門山」が紀ノ川のランドマークとして紹介され、その山の山頂部には 磁石の磁針が狂う「磁石岩」。そして麓の紀ノ川の川岸には赤茶けた鉄分を含む龍門温泉。これは、古代 大和への鉄の道のランドマーク。

紀ノ川を歩くのに先だって まず、この龍門山に登って、磁石岩に出会って、



頂上から紀ノ川の流れをみよう・・・と

夏の日差しのきつい7月24日 青春18キップ片手に 朝早く家を出て、紀州富士「龍門山」に登ってきました。



1. 紀ノ川のランドマーク 紀州富士「龍門山」へ

7月24日 快晴。 日が昇り始めた早朝 神戸の家を出る。もう20年も前になるが、いつも 早朝 難波8時10分発和歌山市駅行 南海特急に乗るため 眠気まなこで家を出たのを思い出す。 和歌山へ行くのは何年ぶりだろうか・・・今日は南海電車ではなく、乗り継ぎの便利な JR 阪和線の大阪駅7時15分発紀州路快速に乗り、和歌山駅で和歌山線に乗り換えて、紀ノ川沿いを龍門山の麓粉河駅まで行く。1本電車はずすと 粉河に着くのが昼になってしまう。阪和線の駅の多さと遅さには閉口で 南海で行くのが、定番でしたが、今は快速電車が走り、沿線に関西空港ができたこともあって、和歌山への行き方も随分変わったようだ。

天王寺から阪和線に入って 40分ほど 大阪湾沿いから 大阪/和歌山の境 和泉山脈のトンネルを抜けて、山を下りだすとぱっと和歌山平野が広がり、海岸側とは反対側の右手奥 遠くの低い山並みの端に左右バランスの取れた秀麗な山が見える。これが 龍門山で、そのバランスの取れた山の姿と紀ノ川河口周辺の海岸から その姿が捉えられることから、古くから「紀州富士」と呼ばれ、紀ノ川を遡って 大和へ入る道筋のランドマークとして よく知られた山だという。

電車は平野部を下り、ほどなく広い紀ノ川を渡る。

鉄橋からは河口の西側にある和歌山製鉄所が遠く見え、家並みの中に滑り込んで、行くと程なく和歌山。 東へ広がる家並みの向う遠くに龍門山の姿が見える。以前は もうすこし河口よりの南海電車からの景色ではあるが、何度も観た景色であるが、紀州富士を意識しながら見たのは初めて。



家並みの奥に紀州富士 龍門山遠望 2007. 7. 24.



紀ノ川 JR 阪和線紀ノ川鉄橋より 河口海岸部を遠望



市街地の奥 和歌山製鉄所遠望 風土記の丘より

また、何度も和歌山へは来ているといっても、和歌山製鉄所と紀州の殿様 和歌山城の和歌山市街地のほかは 以前 西国三十三ヶ所の札場 粉河寺へ行った事がある程度で 紀ノ川沿いの地形や和歌山の古代史については まったく知らずで、今回は和歌山を知る良い機会。龍門山に登って 近畿の屋根 大峰・吉野の山中から流れ下る大河「紀ノ川」を眺めながら、この川筋の歴史をイメージするとともに、日本の鉱物資源帯でもある大断層帯 中央構造線を流れる紀ノ川 よく知られた「水銀」のほか 数々の鉱物が採取されたろう。この山上にあるという磁石岩 近畿でやっと探し当てた磁石石 本当に磁針がくるうだろうか・・・

また、磁石石は「『古代 和鉄の道』の道しるべ」 この川筋の和鉄の道を垣間見るのも楽しみである。

和歌山駅で連絡のある和歌山線の小さなジーゼル車に乗り換え、紀ノ川は良く見えないが、紀ノ川沿いに田園の中を東へ。



JR 和歌山線で 粉河へ 2007. 7. 24. 古代紀氏と関連する岩橋古墳群がある風土記の丘周辺

左手には和泉山脈の山並み 右手には和歌山の海岸沿いから東へ延びる丘陵が続き、これら南北の山々の間に広がる田園地帯の中を紀ノ川がゆったりと流れ下る紀ノ川の下流部。 そんな谷というにはあまりにも広い谷間を奥へ進んで行く。

岩出の街に入る手前で紀ノ川の南岸沿いに走っていた和歌山線が北岸へ鉄橋を渡る。その鉄橋からは紀ノ川の流れの向うに美しい龍門山の姿が見え、このあたりから、谷間の幅が少し狭まってきて、ぐんぐん山が近くなって来る。標高 756m ほどの小さな山であるが、どっしりとした大きな山体がほかを押し、紀ノ川のランドマークにふさわしい。



岩出市の紀ノ川鉄橋周辺より 龍門山



粉河周辺より龍門山の山並み

和歌山駅から 30 分ほど 9 時過ぎに粉河駅着。紀ノ川の対岸に堂々とした龍門山の山体が見えるところが、粉河駅で、この駅前から粉河の集落の中をまっすぐ北側へ続く広い坂道を約 2km ほど登ったところに粉河寺がある。龍門山へは駅の少し東側から南側正面の龍門山に向かって、紀ノ川へ注ぐ小さな川沿いに紀ノ川を渡って対岸へ続く広い通をゆく。

ガイド地図によれば、紀ノ川にかかる龍門橋を渡り、まっすぐ集落、そして 果樹園の広がる傾斜地を中腹まで登ってゆけば、約 1 時間ほどで一本松の登山口である。そこから 左の田代峠への道を登って、龍門山の左肩から稜線を頂上に登って、頂上からまっすぐ北へ明神岩を通して、中央コースを通して一本松登山口へ降りてくる約 4 時間ほどのハイキングコースである。山全体が蛇紋岩でできた山で、いたるところに蛇紋岩あり、頂上部に磁石石があるという。



紀ノ川 龍門橋とその対岸 標高 756m. 龍門山 2007. 7. 24. 龍門山の登山口 粉河で

蛇紋岩は マントルに一番近い超塩基性の深成岩であるカンラン岩が熱水などにより変

質した変成岩で、鉄やマグネシウム クロムなど鉱物を含んでおり、この地が中央構造線沿いの鉱物資源帯の真っ只中の象徴とも言える。でも 紀ノ川と古代鉄 産鉄集団を思わせる話もなく、紀ノ川に砂鉄を産した話も聴かず、まだ 半信半疑である。



龍門山の登山口 MAP とルート図と ならかな斜面が山裾に広がる龍門山

龍門山のならかなの山頂部ピークの右端が頂上 左端部に磁石石 山の左側暗部が田代峠

広大な山の下部斜面に桃や梨・ぶどうの果樹園が広がる ちょうど中央部果樹園の上が一本松登山口

2. 紀ノ川にかかる龍門橋を渡って 龍門山登山口へ

粉河駅の南側にでると広い国道が紀ノ川に沿って東から西に この広い谷を貫いて和歌山へ走っていた。

「国道 24 号線」だという。これも驚き。 僕の頭の中は 国道 24 号線と言うと京都と奈良を結ぶ国道。

この国道 24 号線が 京都から 奈良・大和高田そして 御所と奈良盆地を貫き、南端 御所から五条に入り、紀ノ川沿いを和歌山まで結んでいる。

初めて知りましたが、この道は逆に取ると和歌山から紀ノ川沿いを遡り、金剛・葛城の山塊と吉野山塊の谷間 五条から御所に抜け、王城の地大和へ入り、そのまま京都へつながる古代の幹線の道筋そのまま。この紀ノ川沿いの道が行き来しやすい通商路であったことが、うかがえる。

この時は まだ 紀ノ川は大阪からすると本当に遠い都会から離れた山中とっていたのですが、 この道をまっすぐ東へ行けば 大和。また、粉河の東の橋本から気味峠を越えれば 河内はすぐ其処で、この紀ノ川流域も 大阪へのベッドタウンと発展しているところ。京阪神・京阪奈のベルトだけではないと後でつくづく感じました。

そんな 紀ノ川流域 谷とはいえぬほど広い明るい谷筋が龍門山の頂上から見られました。

この国道 24 号線を横切ると、すぐ向うに まっすぐ龍門山に向かう大きな鉄橋が見える。

この谷間を東から西へ流れ下る紀ノ川にかかる龍門橋。

河口からすでに約 30 キロの中流域 谷間に入ってどんな風に流れているのか???龍門橋から 直接見る紀ノ川である。幅の広い大河がゆったりと東から西へ流れている。また、すでに谷間に入ったといっても 両側の山々は 中央の紀ノ川まで、山麓の広い傾斜地を引いていて、谷間の感じはしない。

南の和歌山側には、ぽっかり風土記の丘の丘陵地が浮かんでいるのみで、広い河口デルタの田園地帯が感じられる。

一方、北側の上流側にも急峻な山は見えず、広い河岸段丘地が、流れ下ってくる奥の奥まで広がっていて、明るい。

大和の北の入口 淀川・木津川が笠置の山々に至るまで とうとうと流れるように 紀ノ川も奥の吉野の山々に差し掛かるまではとうとうと流れているようだ。

上流側のすぐ向うは 霧隠才蔵・猿飛佐助の九度山で、小さい頃の忍者の活躍する深山 山奥のイメージが頭に焼き付いているのですが、そんな面影はどこにもない。都会近郊の里山の景色が川沿いに広がっている。

古代から ずっと 緩やかに流れ下ってきたのだろう。縄文・弥生そして古墳時代とこの流域には数々の集落があり、大和への重要な交通路であったというが、容易に奥地へ遡れたのだろう。私の考えていたイメージとは随分違う。



粉河 龍門橋からみた紀ノ川 2007. 7. 24. 左:北方向粉河の街 中央:東の上流側 右:南の龍門山方向



西方向 河口側 和歌山方面を眺める



東方向 上流側 九度山・橋本方面を眺める



龍門橋を渡って 龍門山山麓の集落の中をまっすぐ山麓へ。標高は低いのですが、遮る物もなく、見上げる堂々とした山体に圧倒される。集落の上の山腹中央へ 緑の中をまっすぐ登ってゆく道が見え、これが1本松登山口への登り道。

集落を抜けると龍門山への標識もあり、果樹園が広がる龍門山の山裾の傾斜地を登ってゆく。

桃・梨・ぶどうの果樹園を見ながら きつい坂道を登ってゆくと一歩松の登山口の標識の横に出る。ここから右に行くと山腹を少し右にトラバースして、そこから直接頂上へ登る中央コース。左は田代峠に出て、稜線縦走路から磁石岩を通って頂上へのコースで、いずれも1時間30分ほどで頂上に立てる。今日は左の田代峠コースから登って、中央コースを降

りる。駅から約1時間 いよいよ登山道に入る。

振り返ると いままっすぐ登ってきた、紀ノ川の龍門橋や粉河の町並みがはるか下に見える。

また、東のほうには、流れ下ってくる紀ノ川の向うに葛城・金剛の山並そして 吉野の山々が見え、頂上に登れば、素晴らしい紀ノ川の眺望が楽しめると思いきやである。



龍門橋



龍門橋からまっすぐ龍門山への集落



集落を抜け、龍門山山腹下部の傾斜地を登る



龍門山山腹下部の傾斜地はどちらを向いても果樹園 眼下に東西に流れ下る紀ノ川 その向うに和泉山脈 東端には金剛山も見える



龍門山中腹 一本松登山口周辺の果樹園

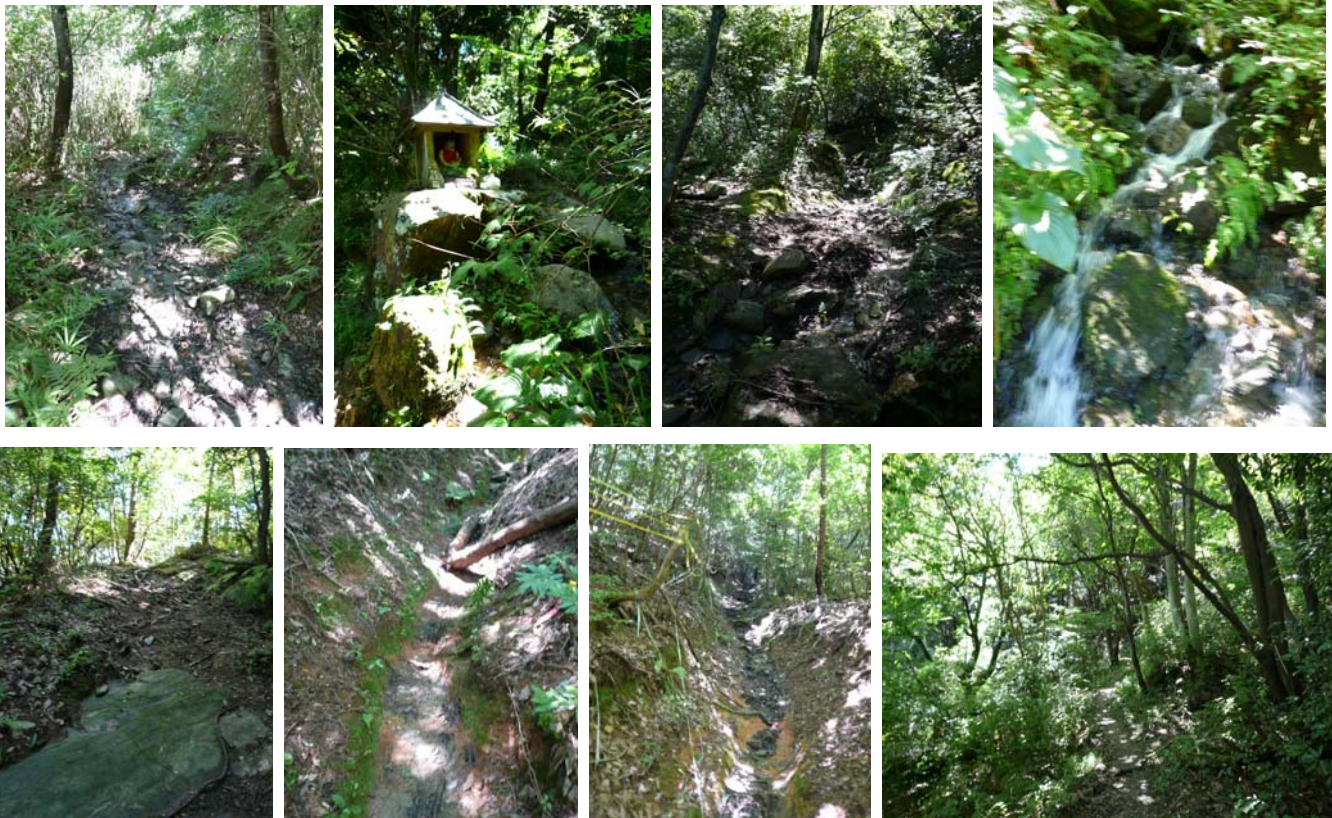


龍門山中腹 田代峠へ的一本松登山口 2007. 7. 24.

3. 田代峠を経て磁石岩へ

一步 登山道へ踏み入れるともう静かな樹林帯の上へ上へと道が続く。緑が濃いというのか、来た斜面なので日差しが入り込まず、蒸し暑い。また 登山道には 道の底に岩が露出していて、滑りやすいが、良く整備された道が尾根筋に続いている。小さな沢から水が流れ落ち、水場になっていて、ここを横切るとすぐ上に地蔵が祭られている。おそらく、かつて この道も南へ 峠越えの生活道路だったのかもしれない。

植林された林帯や雑木の林の中を道が登ってゆく。所々で赤土が出ていたり、掘り切りの道もあるが、総じて、土が少なく、石ころ道で、周りの林も雑木の木々で、大きな木がない。幹の細い木々が密集していて、緑の葉の間から空の光が漏れて美しい。この山が草木の育ちににくい超塩基性の蛇紋岩質であるためかも・・・・・・。



登山口から田代峠へ



田代峠周辺



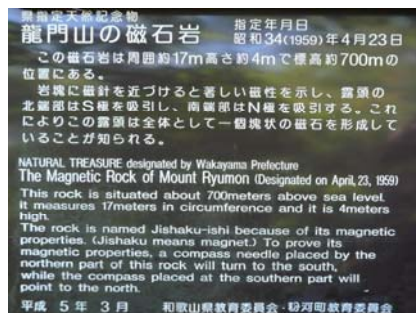
田代峠から縦走路を龍門山頂上へ

木々の間から漏れ来る空を眺めながら上り詰めると龍門山の稜線上の田代峠に出る。ここは広場状になっているが、やはり空は開けているのですが、周囲は雑木で、視界が開けない。ここは龍門山と東の飯盛山の鞍部で、ここから左へ縦走路を登って、二つほどコブを乗り越せば龍門山の頂上である。 相変わらず、灌木におおわれていて、その中を歩く。ところどころに 大きな石がゴロゴロ。この時は気がつかなかったのですが、どうも みんな蛇紋岩の岩。急なのぼりを過ぎて、頂上部の平坦部に出るところで、道をふさぐように大きな岩を回り込む。ここに案内板があり、「磁石岩」。

4. 磁針が狂う磁石岩



龍門山の頂上部 縦走路にどっかり座る磁石岩 2007. 7. 24.
この岩にコンパスを近づけると磁針が狂い、磁石は吸い寄せられる



龍門山の磁石岩

この岩の成因はなんだろう。やっぱり、雷による帯磁なのか・・・

それとも蛇紋岩への熱水変成過程で帯磁したのであろうか・・・

また、古墳時代 この紀ノ川を遡っていった人たちは 磁石が鉄を吸い付ける事や方位磁石を知っていたろうか・・・

周囲 17m 高さ 4m の蛇紋岩の大岩で頂上部の縦走路にどっかりと座っている。

方向磁石を近づけると磁針が狂う。また、マグネットを近づけるとパチンと石の表面にひっつく。間違いなく磁石石。山口県須佐の高山の頂上で見た磁石石は斑レイ岩であったが、この龍門山の磁石石は蛇紋岩。どちらも 鉄分(磁鉄鉱)を含む深成岩質である。近畿にも生駒山系にあると聞いたりして、探していたのですが、この龍門山で出会えました。磁石岩の上に載って、コンパスの磁針の狂いをみたり、マグネットを取り出して 石の表面に引っ付けたり。



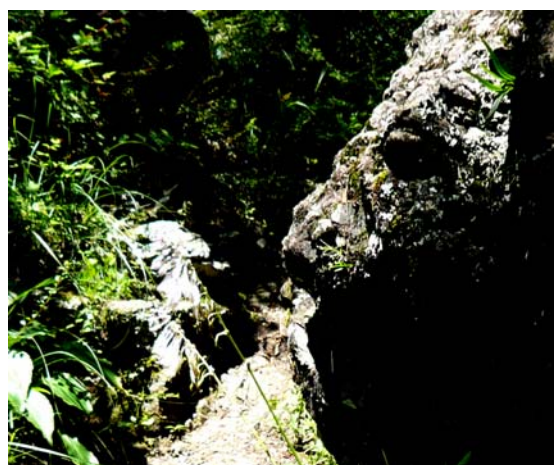
磁石の指針が大きく狂う しかも 石の位置で指針の方向が違うのはこの岩が一つの磁石であるためか・・・

また、中央写真は マグネットを石に近づけるとビタッと引っついてしまう

コンパスを岩のあちこちに持っていったり、地図の方向と磁針の狂いを調べたり、マグネットをあちこちに引っ付けたり 30 分ほどこの岩に乗ってました。大きな磁石岩にほんとうにびっくり。

また、龍門山の頂上部にある岩なので、木々の間を通して、下の紀ノ川や粉河の町並みが見えている。

昔はもっと良く下が見えていたかも知れぬ。巨岩の岩のすぐそばでは シャガの花がひっそりと咲いていました。



磁石岩の上から、木々の間からちらちら 紀ノ川沿いの粉河の街がみえ、岩の傍らには シャガの花が咲いていました

龍門山の麓には 中腹にある蛇紋岩の巨岩「明神岩」とすぐ横にある「風穴」にまつわる龍門山の土着の「大明神」の化身「竜」が「龍門山の蜘蛛」を退治する伝承がある。この伝承も龍門山の鉱物資源・鉄を求めて入り込んだ人たちとの紛争と

巨大な「明神岩」をふくめ、龍門山にある磁気を帯びる蛇紋岩の不思議な魔力が重なって生まれたものでないだろうか……伝承にある明神岩や、風穴は龍門山山頂の向こう側の中央コースを少し降りたところに龍門山の北斜面から飛び出して まっすぐ谷に落ち込む切り立った崖となって この巨岩「明神岩」そびえ、眼下の紀ノ川流域を見下ろし、そのすぐ横のところに風穴が口を開けている。

この「明神岩」も蛇紋岩の大岩で 帰路立ち寄って マグネットを近づけると磁石に引っ付いた。

また、縦走路の磁石岩近くの少しはなれたところにある別の岩に磁石を近づけるとやっぱり磁石が引っ付き、コンパスを近づけると磁針が狂うものもあった。 試しに赤茶けた部分の縦走路の土にマグネットを這わしてみると砂鉄が少しですが採取できる。石を拾って砕くと簡単に割れて平滑な破面がでて、引っ付かなかった磁石がこの破面には引っ付く。蛇紋岩はその変成過程で鉄など鉱物質を割れ目に析出させることがあると読んだところだったので納得である。



縦走路で コンパスの磁針が狂う蛇紋岩



蛇紋岩が顔を出す縦走路 マグネットを土に引っ付けるとわずかであるが砂鉄が引っ付いてくる。

やっぱり、この龍門山はただの山ではない。古くから良く知られた山だったのだろう。

竜神伝承というと「水銀」や「水・雨乞い」との関係がなども考えられるが、この山中にある「磁石の不思議な魔力」や「鉄」に吸い寄せられた集団などを含め、古代にはこの龍門山に数多くの人たちが分け入り、そんな中で生まれた「鉄」の伝承かもしれないと思っている。

【参考 磁石石・ 蛇紋岩の解説】

解説 1. 磁石は何時ごろ日本にはいつてきたのだろうか・・・

解説 2. 麓の集落に残る龍門山のルーツについての伝承

解説 3. 龍門山・磁石岩を形成する蛇紋岩解説

蛇紋岩には鉄・マグネシウムほか 多くの鉱物を含んでいる

解説 1. 磁石は何時ごろ日本にはいつてきたのだろうか・・・

中国では磁石を乳房にたとえると、それに吸い寄せられる鉄はわが子。それを慈しむ母親の姿を連想して、磁石を「慈石」と書いたといわれ、古くから、鉄を吸い付けることを知っていた。また、「韓非子」(紀元前220年頃)には磁石を用いて方角を定めたとの記述もあるが、確かではない。11世紀の書物『武経総要』に、羅針盤のルーツである磁針を木製の魚の腹につけ、水に浮かべ方位を知る「指南魚」の記述があり、これが西洋につたわり、広く羅針盤が使われるようになる。

一方、日本では続日本紀に 713年に天皇への献上品の解説の中に「大倭・参河の両国は雲母、伊勢は水銀、相模は硫黄石・白礬石、近江は慈石を献ず。」との記述がある。

また、822年に編纂された日本霊異記序文に「世間の人々の行動を観察していると、学才や才能を持ちながら卑しい行為をしている者がいる。利益を得ようと願って財物を貪ることは、磁石が鉄の山から鉄を余すことなく吸い取ることよりも甚だし。」と記述されている。この頃には 広く 磁石が鉄を吸い付けることが知られている。

解説2. 麓の集落に残る龍門山のルーツについての伝承

龍門山の蜘蛛伝説 「水原村大明神縁起」より

8世紀（奈良時代）頃、龍門山は高畑山と呼ばれていました。この高畑山に大蜘蛛が住みつき、麓に住む村人や道行く人々の物を奪ったり、殺したりして荒らしまわっていました。大蜘蛛を恐れて誰も道を通らなくなり、付近はさびれてしまいました。このことが朝廷に伝えられ、天皇はさっそく藤原房前に命じて軍隊をさしむけて、大蜘蛛退治が始まりました。

山の麓に到着した朝廷軍の大將は、村人に「九頭龍王をお祭りした神社」の事を聞き、神社に行って「我々に蜘蛛を退治させて下さい。我に神力を与えたまえ。」とひたすら祈った。

祈り続けて3日目の昼過ぎに、山の上空に黒雲が広がり、大粒の雨がポツリポツリと降り出し、瞬く間に空は真っ暗となり、ものすごい勢いで雨が降り出しました。やがて山頂より少し下がった峰に、すさまじい音響とともに岩石が吹きあり、ぽっかりと穴があきました。

すさまじい勢いで雨風が穴から吹きあげ、滝のように流れ出して、麓は大洪水となりました。真っ暗な中から何か光るものが見えたと思うと、穴から大きな龍が姿を現し、龍王は大きな岩へ頭を乗せ、西方の山頂をぐっとにらみつけました。そして、大蜘蛛のいる山頂へと向かったのです。

龍王と大蜘蛛の激しい争いとなり、蜘蛛は口から数百条の糸をはき出し、龍を捕えようとし、龍は口から火を吹き出して、蜘蛛を倒そうとして、戦いの末、ついに龍王が蜘蛛を退治しました。疲れた龍は、静かに山から下りて神社の前の淵へ入って行きました。

麓の村に平和が甦り、人々は龍門山と呼ぶようになりました。龍が出現した穴を風穴（ふうけつ）、頭を乗せた岩を明神岩と言います。また、大雨が降って麓が大洪水になったことで、その一帯を水原（すいばら）＝杉原と言われるように

なった。



風 穴



明神岩 でっかくて崖にそびえているので全体が捉えられない



竜門山の頂上周辺には大量に磁石に引っつく蛇紋岩がゴロゴロ顔をだし、
また、魔力を秘めた磁石岩もある

解説3. 龍門山・磁石岩を形成する蛇紋岩解説

1. 蛇紋岩には鉄・マグネシウムほか 多くの鉱物を含んでいる

蛇紋岩は、地下深部でできた岩石が断層に沿って上昇してきた岩石で、岩体の中には、多くの割れ目が走り、もろく崩れやすい。

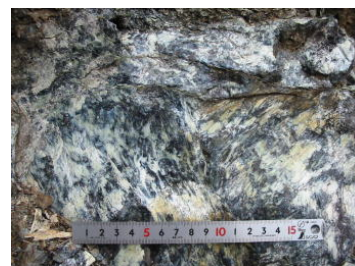
割れた面を見ると、こすれあった跡が筋となって残っていたり、こすれあって鏡のように光っていたりする。蛇の皮のような模様や光沢があるので、「蛇紋岩」と名がついた。

蛇紋岩は マグネシウムに富んだかんらん石や輝石などの超塩基性の深成岩がその岩の割れ目に入り込んだ熱水による変質作用で蛇紋石類に変化し形成される。したがって、蛇紋岩は蛇紋石(化学組成 $\text{Mg, Fe} 3\text{Si} 205(\text{OH}) 4$ のケイ酸塩鉱物)を主成分とし、磁鉄鉱、クロム鉄鉱などを含む岩石で、黒～暗緑色を呈し、炭酸塩の細かい網状脈を伴うことがある。

かんらん岩は地球のマントルに最も近い超塩基性の深成岩で、マグネシウム、鉄などを多く含んでいて、このかんらん石など超塩基性深成岩の不規則な網目状割れ目に熱水が進入して 蛇紋石と磁鉄鉱が生成される反応(蛇紋岩化作用)が進行して、蛇紋岩ができる。

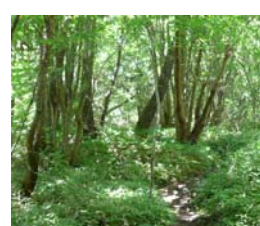
この時、元の原石にふくまれていたFe や Mg などが余り、黒い粒となって元の割れ目に沿って析出する。このため、割った破面が酸化鉄の茶色に覆われている場合もあり、磁石にひっつく物が数多くある。

この蛇紋岩化作用の程度は岩体により様々で、作用の弱いものは元の原岩を構成する鉱物が多く残り、作用の強いものはそのほとんどが蛇紋石化していて、鉄やマグネシウム クロム、石綿、ニッケルなど鉱物資源を内包している事が多い。



蛇紋岩中に見られる網目状の模様

このように 蛇紋岩はマントル成分が変質したものであり、鉄分が多く含まれており、この蛇紋岩が風化作用によって分離され、川筋に集積すると砂鉄となる可能性がある。また、山口の須佐高山の磁石石は磁鉄鉱を含む斑れ岩であるが、山中にある蛇紋岩に含まれる鉄分が雷などで帯磁すると磁石石となったのかもしれない。紀ノ川沿いは中央構造線が東西に走る鉱物資源帯。 水銀の産出が広く知られているが、古代 この山中で同じく 産鉄の民も数多く分け入っていたのかもしれない。



龍門山で拾った蛇紋岩 金槌で簡単に割れ、平らな破面が立体的に出る 2007.7.24.

割った破面が酸化鉄の茶色に覆われている場合もあり、磁石にひっつく物が多い

2. 蛇紋岩をつかった 二酸化炭素固定化による地球温暖化対策の研究がなされている

地中奥深いところで形成されたマントル成分の岩石が、断層や地殻変動で無数の割れ目を帯び、その割れ目に沿って進入する熱水によって、変質して 数々の鉱物資源を析出しつつ、蛇紋岩ができる。

今 この蛇紋岩の「蛇紋岩作用」を使用して、世界の緊急課題となっている【炭酸ガスによる地球温暖化】問題の炭酸ガスの固定化埋蔵の方法が研究されていることを知りました。

財団法人 地球環境産業技術研究機構 二酸化炭素固定化・有効利用技術研究

蛇紋岩体の地化学環境を利用した原位試験による CO₂ 地中鉱物固定のための基盤技術の開発 (2006年度終了)

蛇紋岩の風化に伴い、蛇紋石の主成分であるマグネシウムと大気中などの炭酸ガス、それと水とが結びついてマグネシウムの含水炭酸塩鉱物が網目状に二次的に生成されることがある。この蛇紋岩の持つ炭酸ガスを固体の炭酸塩固定化作用を利用して、蛇紋岩地帯の地中深くに炭酸ガスを吹き込み、炭酸ガスを固定化する。

本当に こんなことができるの????? ですが、すごいですね。やっぱり、蛇紋岩には 得体の知れない不思議さ 魔力がある。

蛇紋岩の山「龍門山」 形が秀麗で眼下を流れる紀ノ川の流れが素晴らしい山 であるとともに やっぱ独特の雰囲気を持つ不思議な山。

5. 龍門山頂上と紀ノ川流域の展望



龍門山頂上からの 和泉山脈を背に 東西に 東の大峰・吉野から流れ下る紀ノ川の流域の展望

磁石岩から視界の開けない灌木の林の中を 10 分ほど小さな登り下りを繰り返して、最後の登りを登り終えると突然広い木がない草原の頂上に出る。北側 木の川沿いの展望がひらけ、ゆったりと眼下を東から西へ流れ下る紀ノ川全体が見える。東の端の山の向こうが大和 はるか遠くに吉野・大峰の山々が浮かび 其処から金剛山から南葛城・岩湧山と続く和泉山脈の山裾をゆったりと紀ノ川が流れる。やっぱり 上からみても吉野までは途中にさえぎるものもなく川を遡れそうで、古墳時代から西からの大和への重要路となって早く開けたことがうかがえる。

川の南側にはこの龍門山・飯盛山から九度山・高野山そして熊野へと山並みが幾重にも折り重なって続き、頂上からは樹木に阻まれて見えない。

縦走路のところどころで、木々のかいだから、時折 龍門山の南側 折り重なるように続く紀伊の山々山々が見えるのみである。



龍門山の南側 折り重なるように続く紀伊の山々 縦走路より



龍門山頂上よりは大和を眺める

中央奥 金剛山 その右奥に大和平野がかすんでいる



和泉山脈の奥に大阪湾 和歌山方面



龍門山直下 粉川を流れる紀ノ川

龍門山頂上より眺める紀ノ川流域 2007. 7. 24.

広い頂上部の草原のいたるところに赤茶けた流紋岩が草の間から顔をのぞかせ、草原いっぱいにシャガの花が咲き誇っていた。残念ながら この龍門山の山頂周辺で真っ白に咲き誇るというキイシモツケソウの花は観られなかった。



龍門山頂上より、紀ノ川流域 2007. 7. 24.



龍門山頂上 赤茶けた流紋岩がいたるところに顔をのぞかせ、この山が他の大和違う顔を見せている



シャガの花が咲き誇る龍門山頂上周辺 2007. 7. 24.

真っ青の快晴 誰一人いない頂上 眼下の素晴らしい景色を眺めながら、昼にする。

汗だくの昼であるが、夏が来たことを実感する暑さが心地よい。和歌山の山は初めてであるが、ほんの近くにこんな静かな山があるとは
 ごきげん。磁石石に出会い、そして、磁石石をいしきしたおかげで、縦走路の岩が次々と磁石に引っ付くのを見つけたのですが、こんな
 山も初めてである。 この紀ノ川沿いがこんなに明るい谷筋であるも始めて知りました。

やっぱり中央構造線沿いの山 何か違う 不思議な山で、ラッキーです。

6. 帰路は蛇紋岩の巨岩「明神岩」から、中央コースの急な尾根筋をまっすぐ降りる



頂上よりまっすぐ中央尾根を北に下る 頂上をでるともう緑濃い森の中

昼寝もして、午後 1 時頂上を後にする。今度は朝登った田代峠への尾根のすぐ西側 頂上からまっすぐ北に伸びる中央尾根の西斜面に付けられた急な下りが続くという中央コースを降りる。

頂上の草原の端からすぐ灌木刈の中に入ってすぐに、そのまま西の勝神峠へ下ってゆく道と中央尾根を降りる分岐に出る。

この分岐から右手に森の中の急な下り道が続く。このあたりは頂上の縦走路とは少し違って、縦走路に土があり、顔を出している岩がすくなく、雨水の通り道になっている。そして 良く観ると そのところどころに砂鉄がたまっている。これだけ鉄分の多い蛇紋岩の山 砂鉄があっても不思議でないと思っていましたが、ごくわ



登山道に溜まっていた砂鉄

ずかですが、雨水で運ばれた砂鉄が道端に溜まっているのを見つけました。

森の中を下ること 20 分ほどで「明神岩」の案内板。右手に行くと大きな岩が北に突き出て視界をさえぎる。これが、「明神岩」でこの岩の上に登らないと様子がわからず。

岩によじ登ると、正面にはぱっと紀ノ川流域が眼下に広がり、右は谷の向うに田代峠の尾根筋が延びている。下は足元がすくむ断崖絶壁の谷である。

高さというか長さ 30mの蛇紋岩の一枚岩が斜めに谷に突きでて刺さっている感じなのですが、全体が良く解らないが、巨岩です。

岩のすぐ横の反対側の山の斜面に深い穴が開いている。これが風穴。



龍門山の中腹にそそり立つ蛇紋岩の一枚岩 「明神岩」 2007. 7. 24.

「村びとの願いを聞いた守り神の化身「竜」がこの風穴から抜け出てきて、この岩に頭を置き、山をにらみつけ、悪さをする大蜘蛛と戦って退治した」との伝承の明神岩である。

これは磁石引っ付かないだろうとマグネットをとりだしましたが、これもきっちり引っ付きまして。

全体が見えないので、岩のすぐ横 山の斜面側にある「風穴」の横を通って、少し小道をトラバースすると岩全体が見え、垂直な崖となつて、谷に突き出しているのが見える。



山の斜面 東側から見上げる「明神岩」



明神岩のすぐ横の山の斜面にある「風穴」

明神岩からまたた、山の灌木の森の中に入り、下へ下へと下って、明神岩から 30 分ほどで キイシモツケの灌木のゲートをくぐりぬけて、一本松中央コースの入口の駐車場のところに飛び出る。キイシモツケの案内板が立っているが、やっぱり 花は見られませんでした。

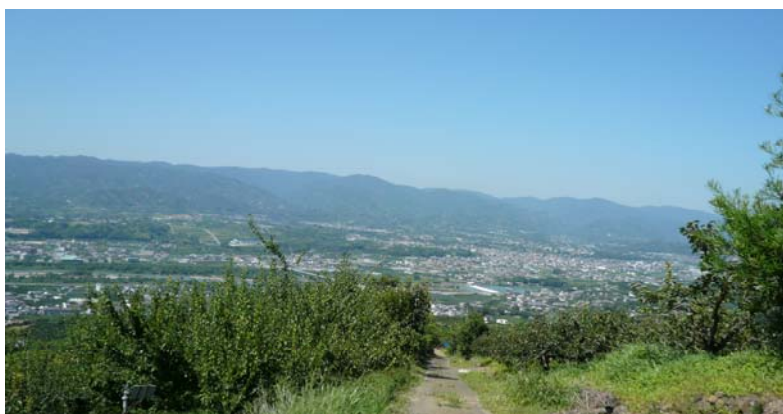


中央コース 登山口へ下山 2007. 7. 24.

ここからは、今日朝 出発した一本松登山口へ 龍門山の山腹をトラバースして、其処からまた、まっすぐ果樹園の中を下って行く。

山の中は 森の中なので問題なかったのですが、里にでると遮る物のない直射日光。本当にきつい。

とにかく、はやく下って、紀ノ川の龍門橋のたもとにある龍門温泉に行こう。



登山口から 果樹園の中をまっすぐ紀ノ川に向かって下る 2007. 7. 24.

7. 龍門山温泉につかって 龍門山 Walk を振り返って



紀ノ川 龍門橋のふもとにある龍門山温泉

龍門山の麓 紀川のそばに湧く「龍門温泉」はどうだろうか・・・

鉄分のある赤湯だろうか・・・龍門山が鉄の山なら、赤湯であるはずと・・・

汗を拭き吹き龍門橋のたもとから、紀川沿いに龍門温泉に飛び込む。

「ナトリウム・カルシウム—塩化物泉で飲むこともできるしよう効く」と。

「ここは鉄泉ですか・・・」と聞くのですが、分析値が張ってないのでよくわかりません。とにかく、温泉に飛び込む。

[illegible]

温泉に入るとお湯が薄茶色。やっぱり、鉄が含まれている。
これは ええぞ……と。

湯船の壁一杯に温泉分析値や効能書きが張られている。

Na イオン Ca イオン Mg イオンほどは 多くなく、1.3mg と鉄線とはほどとおいが、2 価の Fe イオンが含まれている。

やっぱり、鉄分がある。

やっぱり、「和鉄の道」の温泉 赤茶で納得 うれしくなる。

湯船につかりながら、この不思議な山 龍門山の日を振り返る。

和歌山から伊勢へ 日本の資源地帯であり、大断層地帯 中央構造線沿いを悠々と流れる紀ノ川にそびえる龍門山

念願の磁石石にも合えたり、山中の赤茶けた蛇紋岩は鉄を含有し、磁石にバチバチ引っつく鉄の山

川の流れの奥には大和の国がかすんで見え、川の流れを阻む障害もない。縄文・弥生・古墳時代 この川を遡って、大和へ数々の人たちが
入る通商路。そんな交易の中心は紀ノ川河口の紀氏 大和の入り口御所にいる葛城氏が重要な役割を演じた「朝鮮半島の鉄」だったろう。

鉄素材の輸入・鍛冶加工をしながら、必死に日本での鉄精錬をゆめみて、その原料を探したに違いない。

龍門山はそんな山でなかったか・・・・・・

静かな山中に 赤茶けた鉄の石 蛇紋岩 そして 磁石石がころがり、眼下にはすばらしい紀ノ川の流れが見える

むかしも今も 不思議な山 美しい山。

私にとっては 大和へ通じる鉄の道にふさわしいランドマークである。

次はこの紀ノ川沿いを大和まで 遡ろう。

紀ノ川の河口の紀氏 そして大和の葛城氏は 朝鮮半島の鉄と密接な関係を持っており、数多くの渡来の鍛冶集団をも抱
えて、この紀ノ川沿いを行き来している。

古代この地を数多くの製鉄・鍛冶の技術集団が鉄を求めて通ったに違いないと思うのですが、良く解らない。

鉄分が多い龍門山。今回 山中には酸化鉄で赤茶色に変色した流紋岩がいたるところにあり、また、ほんのわずかで
すが、雨水の流れで流れ出た砂鉄もありましたが、色々聞いたり、調べましたが、紀ノ川の川では砂鉄は見つかっていな
いし、紀ノ川流域での砂鉄精錬の痕跡は見つかっていないという。

でも この紀ノ川流域は製鉄集団の通った「大和への和鉄の道」といいたい。

そして、この龍門山はそんな大和への和鉄の道のランドマークだったろう。

2007. 4. 24. 龍門さん温泉につかりながら

Mutsu Nakanishi

後日談ですが、

ゆっくりお湯につかって、ぶらぶら龍門橋を渡る時にはもう、午後4時前。

いままで、深山の真っ只中とっていて あまりにも印象の異なる橋本・五条まで行こうと橋本行のジーゼルに飛び乗り、橋本まで。

やっぱり、明るい。 山はみえるが、深山とはとても思えぬ開けた地 もう びっくり。

汽車がないので、ふと 南海電車の窓口を見ると橋本から堺の北野田まで 480 円。

そんなに近いのか……と北野田にいる友人に電話すると 20 分で来れるので すぐおいで……と。

ほんとに深山と思っていたところが 大阪にこんなに近いのかとビックリ。北野田で途中下車してビールで再会。

ほんとうに愉快な一日でした。



古代大和への入口 紀ノ川 と 紀ノ川のランドマーク 粉河の龍門山 2007. 7. 24.

参 考

和鉄の道

古代大和の鉄の道を訪ねて【1】 淀川・木津川から大和へ 大和の外港 木津「泉津」を訪ねて

<http://mutsu-nakanishi2.web.infoseek.co.jp/iron3/7iron05.pdf>

古代大和の鉄の道を訪ねて【2】 .大和川 「亀の瀬・龍田越」 Country Walk

<http://mutsu-nakanishi2.web.infoseek.co.jp/iron3/7iron09.pdf>

金剛・葛城山麓 葛城氏の鍛冶工房「忍海」 渡来人が住み鉄鍛冶の技術を伝えた古代「忍海」

<http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/iron/5iron05.pdf>

磁石石って 知っていますか 山口県須佐町高山に磁石石を訪ねて

<http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/iron/4iron11.pdf>